

絵本が描く心の世界

モーリス・センダック 『まどのむこうの そのまたむこう』

井原 成男

はじめに——絵本の心理学

時として童話は、どんな心理学書よりも深く、子どもの心の世界を覗かせてくれる。とりわけ絵本は言葉以上に、その作者の意図を超えた子どもの心の

深層を垣間見せる。今回はそんな絵本の中から、私の好きな、そしてたびたび発達心理学の講義の中で紹介する機会が多い、センダックの『まどのむこう』の『そのまたむこう』の世界を覗いてみたいと思う。

ストーリー

物語は、船乗りの父親が航海に出かけての留守中に、まだ赤ちゃんの妹を守ってくれるよう、母親ではなく姉のアイダに頼むところから始まる。父の留守中、ゴ布林というひどい悪さをする妖怪がさらいに来る。姉のアイダは、はじめ騙されて妹を連れ去られてしまうが、黄色いコートに包まれ、抱えられるように、窓の向こうに飛び出していくのである。

その途中、おそらく父親の乗っている船からのものと思われる船乗りのホーンパイプ踊りの音楽に導かれ、すでにゴ布林たちに赤ん坊にされ、やがては水の中に引き込まれようとしていた妹を見つける。そして間一髪、妹をゴ布林たちのもとから取り戻し、川に沿って家に帰るのである。家に帰ると、そこにはすでに父親からの手紙が届いており、

手紙には、アイダが妹を守ってくれると信じていると書かれていた。アイダは父の音楽という導きを得て、その言葉どおり妹を守りきったのである。

センダックの制作態度

ストーリー自体はそれほど複雑なものではないが、センダックの完璧主義によって、およそ一年半の試行錯誤を経てのち完成された。センダックの発想自体は直感的で、一気に書き上げてしまう作家であるとされている。センダックは、絵は共同作業で作成することが可能でも、文章自体は完璧なものではないなければならないという持論のもと、関係を絶ち一人閉じこもって完成させるという。センダックは、田舎の森に一人で、犬と共に住んでいるというが、こうした制作態度は、同じく周りに塀をめぐらし、孤立した形で住んでいるとされるサリンジャーを彷彿とさせる。

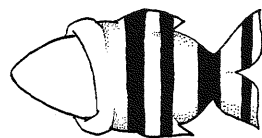
こうした制作の経緯からみても、この物語にはセ
ンダックが直感的にとらえた女の子（女性）の心の
深層が描かれているだけでなく、文章の推敲によっ
て、単なる思い付きではない、心の典型を扱ったも
のになっていると思う。

女の子と父親の役割

父親は女の子が社会化されるに当たって、その手
がかりを与える存在であるとされる。アイダも、は
じめはゴブリンに騙されるのだが、父親の導きであ
る船乗りの音楽に導かれて、妹を守り通すことがで
きたのである。センダックが推敲を重ね、完璧なも
のであると自負する文章を丁寧に読むと分かるのだ
が、導きの底には、最後の手紙にあったように、父
親の絶対的な信頼があった。信頼と音楽という情緒
をも含んだスキルによってアイダは成長することが
できたのである。

アイダが部屋にいる間、窓には父
の船の航行が映し出されている。そ
の様子はアイダの心と平衡して、穏
やかであったり嵐になったりする。
ここには父の心の状態と女の子の心
の状態が平衡するという本質的な心
理も描かれているようである。

面白い事実がある。センダック家のアルバムを見
ると分かるが、この絵本に描かれている赤ちゃん、
つまりアイダの妹は明らかにセンダック自身をモデ
ルにしている。もしそうであるならアイダは、セン
ダックの実際の姉をモデルにし、さらにそれを極上
に理想化した女性像になっている可能性がある。
センダックの母親は実際、どんな人だったのだろ
うか、優しかったのか、それとも身近な姉を理想化
しなければならぬほど厳しかったのか、気になる
ところである。



黄色いレインコートと母

この絵本の原題は「Outside Over There」であるが、「まどこのむこうのそのまたむこう」の他に、「それはすぐそこ」という訳もある。二つは外という外界に対するニュアンスがだいぶ違う。危険な外界はすぐ近くなのか、向こうで遠いのか、かなり違うのである。あるいは、遠いようであるが実際はすぐ近くにあるという二重の意味が込められているのかもしれない。

アイダは、妹を取り戻しに危険な外に出るとき、まず手始めに黄色いレインコートに包まれて、まるで雨から守るように誰かに抱かれているかのようである。色彩心理学の教えるところによれば、黄色は依存の色である。しかしずっとこの姿勢でいることは許されない。父の導きである船乗りの歌は、「うしろむきではなんにもならぬ、くるりまわってホル

ンをおふき」と教えるのである。

アイダはその示唆に従い、すでに赤ちゃんの姿にまで戻され、まるで体内の戻るように、水の中に消えようとしている妹を発見する。

ホルンは、子どもに帰ろうとする子どもの心を前進させる、導きの糸なのである。

ところで、この絵本に登場する母親はアイダの活躍に引きかえ、なんとも力のない、存在感の薄いものとしてしか描かれていない。よくよく考えると妹を守るのは母親の役目なのではないか。この母親には、おそらくゴブリンは見えないと思われる。そう考えると、この物語は子どもを成長させない母親の持つ否定的な面から、それを成長へと導く父親の導きの糸の物語であるとも読めるのである。

ゴブリンと退行

ゴブリンとはどんな妖怪なのか。

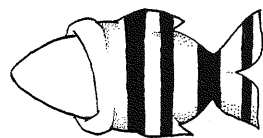
辞書によれば、それは子どもを退行させ大人にならないようにさせる悪さをする妖精なのだという。

この絵本では、ゴブリンも生まれたての、ただブウブウ言うだけの赤ちゃんに描かれ、また妹も、その中にすでに紛れ込んだ姿で描かれている。卵の殻から孵ったばかりの赤ちゃんは、分離個体化理論のマーラーの使う孵化というコンセプトを彷彿とさせる。これ以上退行すれば、体内の羊水に還るのかもしれないと思わせる。おそらくゴブリンとは人間の中にある体内回帰願望の憧れと恐怖の部分をイメージにしたものであろう。センダックは彼の直感と感性でそれを描き切っている。

音楽と導きの糸

導く糸が他ならぬ音楽であるのは面白い。センダックはこの物語を書いている間中、モーツァルトの音楽をかけていたという。絵本の中には、妹を助

け出し、小川に沿って道を帰ってくるアイデアが描かれているが、小川の向こうには、モーツァルトが魔笛を作曲したとき使った作曲小屋が描かれている。センダックは、アメリカ人らしくディズニールランドが好きだっただけでなく、モーツァルトが



とても好きだったという。モーツァルトは先祖がポーランド出身であったというセンダックのヨーロッパ的な深層部分を表しているのかもしれない。老ゲーテが、モーツァルトを聞き、「これは悪魔の音楽だ」と叫んだという逸話は有名であるが、この、人の心の退行と進歩の妙、あるいは恐怖を扱った作品にとっては、モーツァルトの悪魔的な旋律こそがふさわしかったのかもしれない。センダックはモーツァルトの旋律に浸りつつ、この絵本の文章を完璧なものにしたのである。

終わりに——センダックと女性

先ほど、センダック家のアルバムの話をした。そういつては失礼だが、写真で見るセンダックの母親はたくましく、彼の出世作である、『かいじゅうたちのいるところ』に登場する怪物、「おれたちはおまえが、食べてしまいたいほどすきなんだ、食べてやるから行かないでくれー」と叫ぶ怪物たちに似ている。そもそも、『かいじゅうたちのいるところ』の主人公マックスは、いたずらをして、ご飯をお預けにされ、お置置きに母親から部屋に閉じ込められたのであった。

センダックにとってアイダは、こうした厳しい母親を緩和し、理想の母を作り出すための道具立てであつたように思われる。しかしセンダックの直感には、また、この絵本に描かれたような、ほんやりして守られるだけの女性では、子どもは退行しゴブリ

ンにさらわれてしまうだけに終わってしまうということを見抜いている。おそらく移民の子であり、ニューヨークをブルックリンの貧民街から憧れに満ちて眺めていた家族を、このたくましい母親は生き延びさせたのである。

センダックは独身で、ホモセクシャルであつたという。彼が、現実の女性を受け入れるには、女性を巡る優しさだけでなく、こうした女性の逞しき現実をも受け入れることが必要だったのでないだろうか。センダックが、後年その認識にまで達したかどうかは定かでない。

(お茶の水女子大学)